

11月第1週の礼拝説教

■日時：2022年11月6日（日）10：30－11：30 降誕前第7主日（召天者記念礼拝）

■説教：保科けい子 牧師

■説教題：「陰府（よみ）に身を横たえようとも」

■聖書：詩編139篇（旧約p979）

■讃美歌：156「目を上げ、わたしは見る、山々。」385「花彩る春を この友は生きた、」

本日の礼拝は、私たちに先立って天にいます神のみもとに召された方たちを特に覚えて「召天者記念礼拝」としてささげています。例年通り、ご連絡のつくご遺族の方々にはご案内を差し上げましたので、お見え下さっている方々もおられます。また、ここに多くの方々の写真が飾られているのは、その方々がかつてこの立川教会の礼拝に集っておられたことを覚え、私たちがまたそれらの方々の信仰に倣って歩んでいきたいという願いからです。しかし、ここの写真の方々がすべて信仰者として立川教会に連なっておられたかといえ、必ずしもそうではありません。立川教会員のご家族であった方々もおられます。新約聖書の使徒言行録の16章31節に「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。**」とあります。キリスト教の大伝道者と呼ばれる使徒パウロと彼と行動を共にしていたシラスが語った言葉です。2千年以上も前に語られたこの励ましの言葉を信じて、ご家族のために祈り続けておられた立川教会員のお姿が思い起こされます。また、教会員ではありませんでしたが、生前に立川教会のために様々なお働きをしてくださった方々もおられます。さらには、キリスト教でのご葬儀を生前に希望しておられたので、立川教会でのご葬儀をなさった方々もおられます。私は、先週の1週間、これまでの牧師から引き継いだそのような方々が記されている「召天者名簿」に毎日、目を通しておりました。また、立川教会の歩みを記す『50年史』『60年史』『70年史』とも関連させて、教会の最も大切な資料である「教会員原簿（世の中のものであれば戸籍と考えるとよいかもしれません。）」と照らし合わせ、お一人お一人のことを覚えておりました。

そして、本日、この礼拝に集っておられる方々はすべて、ご家族や友人、お知り合いなど、親しい方々を亡くされた経験をお持ちのはずです。それらの方々は必ずしもキリスト教に親しんでおられなかったかもしれませんが、この礼拝では、どうぞそれらの方々をも心に覚えて、主なる神様の平安のうちにあるように執り成しの祈りをおささげください。

さて、本日の聖書の御言葉は詩編139篇の前半部分を選びました。詩編139篇の1節から12節では、神様が私達の全てを知っていらっしゃるという「全知」について、また、神様はどこにでもおられるという「遍在」について歌っていると言われています。神さまがどこにでもおられるというときに、本当に私達と共にいて下さる、私達を憐れんで恵みのうちにいつも顧みていて下さるということを、具体的に確認しつつ歌っているのです。そして、そのことが8節で「天に登ろうとも、あなたはそこにいまし 陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます。」と記されているのです。「陰府」とは、日本においても聖書の世界においても死者の世界のことを意味しています。特に、旧約聖書においては、生きている間にどのような素晴らしい生活をしていたところで、死ぬことはすべての終わりを意味していました。しかし、詩編139篇はそのような世界観や人生観をはるかに超えて、「陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます。」と歌い、私たちがたとえ死ぬことになってもそこには必ず神様がおられる、と力強く断言しているのです。8節の「天に登ろうとも・・・陰府に身を横たえようとも」という言葉では、私たちの世界の時をも超えた上下のすべての領域を、9節の「曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも」という言葉では世界の横の広がり領域を表しています。10節では、「御手をもってわたしを導き 右の御手をもってわたしをとらえてくださる。」と歌って、全世界のどこにあらうとも、私は神様の導きと守りの中にとらえられている、と声高らかにほめたたえているのです。そして、11節12節で、「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。12 闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち 闇も、光も、変わるところがない。」と、私たちがどこにいても光が共にある、と宣言しているのです。私たちににとってのこの光とは、イエス・キリストにつながることによって与えられるところの光ということになります。そして、これこそが主なる神様の愛であり恵みです。ところで私は、最近の主日礼拝の中では、使徒信条を聖書の御言葉と関連付けてお話しています。そのなかで、主イエス・キリストについて「主は聖霊によりてやどり、処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)にくだり、」と告白している箇所があります。そのなかの「死にて葬られ、陰府(よみ)にくだり、」という文言がまさに、詩編139篇8節が歌っている箇所につながるのです。このことを、「主イエスは、神を信じることなく死んだ人々のところへ行って、そのような死者たちにも福音を宣べ伝えて下さったということではないか。ここに、主イエスが陰府にくだったこととその意味が語られている。主イエスは陰府にくだり、死者たちにも伝道して下さったのだ。」と考える立場があります。私自身も、そのように信じてこれまで歩んできましたし、これからも歩んでまいりたいと思います。召天者を記念して覚えるという礼拝は、そのような

意味で、私たちとすでに召された親しい方々とのつながりをもう一度確認し、ここから新しい歩みへと踏み出す出発点にもなるのです。